

## 第56回 東海伝統工芸展 受賞者紹介

日本工芸会賞 紙胎蒟醬嵐影合子  
安藤源一郎（漆芸）愛知県

風が吹き渡り、木々が揺れてざわざわした音が聞こえたり、一方で静謐な美しさがあったり、山は様々な表情を見せてくれます。そんな身近な山の気を主題としました。素地は紙胎の技法で、和紙を石膏型に十数枚貼り重ね、厚みが得られたら型から外して素地とします。その素地に下地と漆を塗り重ね、蒟醬の技法で加飾し、器全体を山に見立てて表現しました。私が住んでいる豊田市の小原という地域は室町時代から紙漉きが受け継がれてきたほか、かつては漆の産地でした。こうした文化は私にとっては大きな財産であり、その中で制作できるというのは大きな喜びですし、創作の力ともなっています。今回の受賞を励みにより魅力のある作品を作り出せたらと思います。

東海伝統工芸展賞 萬古渋色線刻文鉢  
清水潤（陶芸）三重県

近年、追及している焼メの新しい表現です。釉薬を使わない萬古焼の伝統粘土である紫泥粘土を用いた焼メ。鉄分を多く含んだ炆器である紫泥粘土は、収縮率が高く吸水性がほとんどありません。故に、萬古焼では昔から焼メの製品が多く生産されております。その粘土に拘り、自分らしさを作り出すために挑んでおります。焼成温度も難しく、粘土の限界温度で焼成しなければ光沢が生まれませんが、少しでも行き過ぎると表面が荒れてしまいます。無地で美しい状態に焼き上げた後に、表面を削り文様を施します。新しい焼成方法や文様などを考え新しい萬古焼を生み出すために、今後も挑戦していきたいと思っております。

愛知県知事賞 畝織着物「檸檬」  
水谷陽子（染織）三重県

「城のある町にて」は、梶井基次郎が一時期滞在して書いたものだと、松阪城址の近く、以前の職場で聞いたことがきっかけで初めて手に取った短編集でした。ただ、何回挑戦しても全然進まない。同じ行を何回も読んでいることに気付いたとき、読むのを諦めました。最近になって、ふっと思い出し「檸檬」を読んでみることに。現代文なのでするすると読めたけれど、やっぱり理解したとは言えず。すっきりしたような息苦しいような、このもやもやした感情、レモンの鮮烈な黄色を作品にしてみようと思い、制作しました。レモンの明るく澄んだ黄色を表現したいと思い、黄色の染料、支える色、白の分量に悩みました。反省点も多く、次回に生かしたいと思っております。

岐阜県知事賞 鉄絵掛分釉描大皿「花筏」  
前田正剛（陶芸）愛知県

このところモノトーンでの表現を試行錯誤しております。そして具体的なモチーフだけに頼らず、「現象」も表現出来ないものかとも。今回の作品のテーマは、過去に名品も多い桜とその季節感を、具体的に描かずどう表現するかとしておりました。以前から水に浮かぶ桜の花弁、いわゆる「花筏」は念頭にあったのですが、水面の表現が思い付かずうまくいっておりませんでした。そこで「波紋」を描くことを思い付き、今回の表現に至りました。結果が出るまでこのような評価を頂けるとは思ってもおりませんでした。大変良い冒険ができたと思っております。

## 名古屋市長賞 色絵流加彩片身替わり鉢

梅本孝征（陶芸）愛知県

片身替わり。安土桃山時代「歌舞伎者」の自由奔放な風潮に洒落気のある粋な装いとして時代を映す意匠。この意匠を立体として表現するために器の立ち上がり部を切り離し、貼り合わせる事で器面が段差により分かれ、立体的造形感が強く得られる。また図案は、青を基調とした石畳文様と黄色を基調とした花文様を対象的に描き、片身替わりの面白さを引き出す。そして、色釉を流すことで焼き物ならではの表現をする。片身替わりの意匠が、歴史の中で生き生きとあったように、洒脱で面白いものになっていれど。

## 中日賞 紬織着物「風薫る」

加藤玲（染織）愛知県

山へドライブに出かけた時にポッポッと咲き始めの山躑躅が目に入りました。今にも降り出しそうな曇天の日に、これから迎える季節と自然の色を見ました。その情景を表現したわけではありませんが、緑の中の赤色に惹かれて、それをヒントに世界を広げました。補色を隣合わせることは危なっかしいものですが、その色合わせに魅力を感じます。実際に観る、自然の中の美しく感じられる色の組合せをどう表現するか。濁らないことに気を遣い配分しました。技術が未熟なために自身の意図が表せ切れず、常にもどかしさを抱えていますが自分が観た世界を着物という形に表現して、纏うことが出来たらと想っています。

## NHK 名古屋放送局長賞 「染付金魚鉢」

小枝真人（陶芸）静岡県

金魚の美しさは、その優雅に揺れるひれの動きや、水中で光を受けて宝石のようにきらめく鱗にあると思います。それを器という立体物に描くことで、平面では表現しきれない奥行きや光の反射を活かした表現が可能になります。また、器の余白は水の存在を感じさせ、描かれた金魚がまるで本当に泳いでいるかのような錯覚を生み出します。その錯覚こそが、今回のテーマです。素地の色や呉須の色選び、筆運びに宿る自身の息づかい、そしてデザインとしての金魚の配置。それらすべての要素が組み合わせることで、自分らしい金魚の美しさを新たな形で表現したいと考えました。器の形状や質感を活かしながら、単なる絵付けにとどまらず、見る人に水の存在や金魚の生命感を感じていただけるような作品を生み出したいと思いました。

## 安藤氏賞 「神代杉木画箱」

馬淵弘幸（岐阜県）

ここ数年、神代杉で木画の箱を制作するうえで、柾目を合わせる文様に対して、隙間の部分をどのように表現するかを思考を巡らしていました。そこで、隙間部分として、少し緑がかった朴の木を使ってみようと考えました。木画の文様として、今までと違った感じが出て、また、イボタとの相性もよく、自分なりには納得できた表現となりました。しかしながら、まだまだ、新しい木画の表現はあると思いますし、箱と木画の構成のバランスを考える余地もあります。この受賞を励みに、より精進していきたいと思っています。

東海伝統奨励賞 「色絵大鉢—明日へ—」

佐藤颯真（陶芸） 愛知県

私は大鉢を制作しました。大鉢だと高低差が生まれることや、さらに内側と外側、両面に絵付けを施せることから、表現の可能性が広がると感じ今年から大鉢の制作を始めました。底から上へ広がっていくこの作品の形から積もり積もってゆくイメージが生まれました。さらに、この作品を制作した2月の中旬は外が少し暖かくなり始めた頃でした。暖かさを感じたことをきっかけに、春にネモフィラ畑を訪れた過去を思い出し、ネモフィラを描こうと決めました。過去に見たネモフィラと日々積もりに積もってゆく気持ちを思い起こしながら絵付けを進めました。これからもっと制作に励み、見つけることの出来なかった感動を発見していきたいです。

東海伝統奨励賞 吉野織帯「春の光」

伊藤紗綾（染織） 三重県

いつもと違う吉野織をしたいと思い吉野織の変化組織に挑戦しました。糸はいつもは紬糸を使っていますが、緯糸を入れて織ってみると、つるつとして光沢のある生糸のほうがこの組織には合うと思い、初めて生糸だけを使用した帯を制作しました。身近な自然で採れる、臭木、クチナシ、マリーゴールド、葛などで染め、春の日差しに照らされた若葉や水面などがキラキラと輝く様子が表現できたのではないかと思います。新しい組織、今までとは違う糸などを使用した今回の作品はとてもワクワクした気持ちで出来、自分の中で新たな発見が出来ました。次の作品のステップができた様な気がします。

東海伝統奨励賞 雨上がり蒔絵箱

若林雅子（漆芸） 愛知県

この作品では、雨上がりの葉の上にびっしりとついた水滴が、キラキラと輝く光景を表現しようと思いました。今回の作品には研ぎ出し蒔絵の加飾技法を用いています。修行中には、この技法で金粉を削りすぎてしまった苦い経験がありました。そのため、今回は慎重になりすぎてしまい、逆に金粉を研ぎ足りない部分が出来てしまいました。技術不足を痛感するとともに、次の作品への課題としたいと思います。また、去年は輪島で大きな災害がありましたが、その中でも制作を続けられていた先生方の姿に深く敬服しました。まずは、作品の作れる環境に感謝しながら今後も制作を続けていきたいと思っています。